The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	僧侶の被災地支援 ： 令和6年能登半島地震災害支援
Author(s)	髙柳, 龍哉
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

僧侶の被災地支援
—令和 6 年能登半島地震災害支援—

髙柳　龍哉*
TAKAYANAGI Tatsuya

1. はじめに

全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）は、全国 49 地域の曹洞宗青年会の連絡協議体として活動している。平素は寺院のみならず社会に飛び込み、一般の方も禅に親しむ活動を展開している。阪神淡路大震災より炊き出しなどの本格的な災害支援活動を開始し、東日本大震災では炊き出しなどの他にも、僧侶ならではの傾聴活動を長期にわたって行い社会に認められてきた。大地震の非常時に、僧侶はどこまで支援ができるのか？何をしたらいいのか？本稿では、全曹青の令和 6 年能登半島地震の発災から 1 年間の災害支援活動について報告する。

2. 初動、現状把握と連携

令和 6 年能登半島地震発災時にはメディアを通して多くの被害報道が流れていたことから、発災日の 1 月 1 日の夜には緊急のオンライン会議を開催した。メディアや SNS を通じて被害状況があきらかになりつつも、専門家による余震への警告もあり、いつ現地入りするのかの判断に迷っていた。そこに、金沢在住の会員から、無事であること、金沢市内は落ち着いているとの情報が入ってきたので、1 月 3 日に支援物資を車に積んで金沢まで向かうこととした。

1 月 3 日には金沢入りし、地元の加盟団体である曹洞宗石川県青年会（石川曹青）との連絡体制の確立、情報共有、今後の支援内容について協議を進めた。

* 勝平寺・副住職、全国曹洞宗青年会・災害復興支援部アドバイザー（活動時は副会長）

また、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（以下、SVA）と 1 月 15 日にオンラインにて会議を行った。事業調整人員・物資、炊き出し調整人員・避難所運営人員・炊き出しチームの派遣について話し合われた。

この時より全曹青は石川曹青、SVA と協働し能登半島地震支援活動を開始した。

3. 物資支援

発災以降、広域に避難所が開設され公的避難所だけでは足りず、自主避難所としてビニールハウスや自宅ガレージを開放しそこに身を寄せている方が多くいた。能登半島にお寺がある石川曹青会員も多くが避難所へ滞在しており、何もかもが足りないが特に水とガソリンが急ぎ必要であるとの連絡を受け、水の物資支援を開始。全曹青が運営している災害用メーリングリストを利用して、全国の加盟団体とメーリングリスト登録者に水、ポリタンクの募集をした。配送可能であった金沢の寺院を配送先とし、金沢からは地元の会員や、曹洞宗関係者の手によって速やかに避難所へと運搬された。公的避難所には一立米のウォータータンクが設置され 1 週間ほどで物資支援は終了し次の活動へと移行した。

写真 1　避難所への物資支援（以下、写真は報告者提供）

4. 物資運搬と避難所現状調査

報告者が全曹青として 1 月 17 日に現地入りした際には他団体からの要請を受け、七尾市に集められた支援物資を奥能登の高齢者支援施設へ運搬する活動を行った。高齢化が著しい能登半島では多くの高齢者支援施設が点在するが、そのほとんどが避難所への移動が不可能であり、ライフラインが切断され物資が届かないなかでの生活を強いられていた。発災より 16 日間下着の着替えもできない様子で衛生状態が心配されていたので衣類を中心に届けた。

また、並行して公的避難所の現状調査を行った。避難所現状調査は石川県では情報の集約が追い付いておらず、どこに何人避難しているという情報しか把握していない様子であった。県庁に滞在している支援者団体を通して、副知事からの正式な依頼として石川県の腕章を着けて珠洲市、能登町、穴水町の避難所を回り・トイレや入浴などの生活環境の衛生状態・就寝状態・食事状態・避難所施設の損傷状態などを実際に訪問し、話を聞き、写真を撮影し県へ報告を上げた。これをもとに 1 月 20 日には知事より支援方針の記者会見が開かれた。

写真 2　避難所の現場調査

写真 3　避難所での炊き出し準備の様子

各避難所を訪れ共通して言えることは、外部に対する非常に高い警戒心を感じたことである。どの避難所も対口支援の方、自主的に避難所運営に協力している若い方への聞き込み調査となったが、他県ナンバーの車で訪問

したことで警戒をさせることとなった。僧侶であり阪神淡路大震災から被災地支援をしている団体であると説明をすると、若い女性は警戒を解くことなく差し障りない内容を話すのみに留まったが、男性や高齢者は安心して内情を話していただけた。被災地にて支援活動を行う上で現地の方々の理解は必要であるが、僧侶であることが被災者へ安心を与え、受け入れてもらうことができたのではないか。これは地元僧侶の長年の活動の結果であろうと考える。

5. 避難所支援

1 月 20 日より輪島市門前町に入り SVA と協働で避難所支援を開始した。門前町は横浜に移転するまで、曹洞宗の本山の一つである大本山總持寺があった地である。現在も大本山總持寺祖院として修行僧を抱え、地元の誇りとなっており、全曹青もここ近年は様々な行事を手伝ってきた。海原が青くゆっくりどこまでも続き、背には山々を抱く風光明媚な土地だがこの震災で大きく地形が変化した場所の一つとなった。海岸が 200 メートル沖に広がり、漁港は 4 メートル隆起した。山は崩れ道路が寸断され豊かな自然が支援の壁となる、そのような地域の避難所に入った。

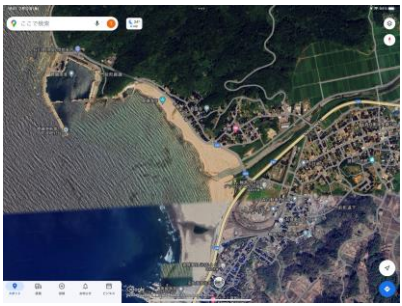

写真 4　輪島市門前町

写真 5　隆起した漁港

避難所では衛生管理、食事管理、傾聴活動を行った。避難所生活は新型コロナウィルス感染者も発生しており衛生管理には特に注意を払った。避難所内ではマスク着用、出入りの際はアルコール除菌など基本的なことの他

に清掃に力を入れた。トイレ清掃では夜間暗い中で屋外の仮設トイレへ行かなければならず、仮設トイレ内も暗く狭いため、外へ汚物がはみ出ていることも多くあった。感染対策や１日を快適に過ごす為にも朝の清掃が大切であった。また、感染者隔離のために用意していた専用のトイレは建物内２階に設置されており、雨水を溜めた大きな桶を数人で２階まで運び給水する作業も毎日行った。

食事管理は一日 2 回昼食と夕食の準備提供を行った。行政の支援として他県からキッチンカーが毎日食事の提供に来ていたが、衛生上の問題で生もの、汁ものも禁止され、栄養が偏った食事の提供が長く続いていた。避難所代表者と相談し自分たちで炊き出しを行うこととなり、支援物資として届いた食材を使用して約 200 名分の炊き出しを行った。この他にも全曹青の災害用メーリングリストを活用し全国の会員へ炊き出しの呼びかけを行い、そのコーディネートを行った。3 月末までに多くの地域から沢山の青年会に現地へ入っていただきご当地ご飯や、温かく栄養のある食事の提供ができた。

写真 6　ビハーラ秋田との合同炊き出し支援

写真 7 全曹青による炊き出し支援

空き時間には傾聴活動として足湯活動を行った。発災以降入浴出来ていない方が多い中で、体をお湯に浸ける行為に緊張を解す効果があったと感じる。足をお湯に浸けながら健康の話、発災時の話、今困っていることの話、これからの不安などを口にする方が多かった。なかでも「お坊さんだから話

せることだけど」、と前置きの後、ご近所さんや親戚が亡くなった話、災害時の葬儀の話などデリケートな話題も話を聞くことができた。僧侶が災害時に被災者へ寄り添う一つの形がここにあると考える。

写真 8　避難所での足湯活動

6. 寺院支援

能登に宿泊施設が少ないこと、半島特有の点として道路が少なく移動時間がかかること、道路事情が刻一刻と状態が変わることを考慮し、宿泊、休憩などの使用許可を 2 ケ寺からいただいた。奥能登移動の前泊や口能登での支援活動の拠点として羽咋市・永光寺、奥能登での拠点として輪島市門前町・大本山總持寺祖院をお借りした。

永光寺は 1 月下旬より、宿泊等の他、炊き出し時の切り込みや下準備、水の供給もさせていただいた。同寺は曹洞宗石川県宗務所でもあり、対策本部も設置されていたことから、物資も集まっており、さまざまな調整を密に行うことが出来た。總持寺祖院は被害が大きく宿泊環境を整える為にも、2 月中旬より瓦礫の撤去から支援を開始した。

他の寺院は、住職・寺族といった関係者が、避難所へ身を寄せていることが多かったため 5 月初旬まで支援のニーズが少ない状態が続いていた。

写真 9（左）、写真 10（右）　被災寺院の修繕

ゴールデンウィーク後に全曹青、石川曹青合同で七尾市から珠洲市まで内海側と山間部の約 30 の寺院を回りニーズ調査をした。七尾市など建物被害の小さい地域では既に復旧済みの寺院が多く見られ、珠洲市や輪島市まで行くと完全に倒壊している寺院もあり、素人のボランティアでは手が付けられない状態であった。半壊の寺院では本堂内の仏具が散乱したり、壊れたりしている様子も見受けられ、仏具などの取り扱いに慣れない一般ボランティアでは対応が難しいこともあり、全国から僧侶が集まり可能な範囲で修繕、整理を始めた。今回の地震では広域に渡り甚大な被害が発生し、寺院関係者のほか、檀家も皆被災している状況で寺院の再建に向けて希望を見いだせない寺院関係者もいる。

7. 仮設住宅での支援と傾聴活動

8 月末には門前町にも十分な数の仮設住宅の建設が終わり、入居が始まった。この時より避難所支援から仮設住宅支援へと活動の移行を始めた。

能登半島は今なおご近所付き合いが多く残り、町内の結びつきが強い特色がある。門前町には数か所仮設団地が建設されたが、町内ごとに入居できたわけではなく、それぞれの場所に別れての生活が余儀なくされた。そこで当会では、各仮設団地内でのコミュニティの構築・災害関連死の予防を目的に傾聴サロン活動「おぼうさんカフェ」を開始した。

写真 11（左）、写真 12（右）　仮設住宅での傾聴サロン活動

仮設住宅団地内にある集会所をお借りして開催し、どの場所も 15 名～25 名ほどが参加される。開催初期にはそこで初めて顔なじみを見つけて喜ばれる方も多かった。8 か月にも及んだ避難所生活では常に人の声が聞こえ、それが安心につながっていたと思うが、独居生活の方は知り合いのいない仮設団地での慣れない生活に不安を抱いていた方もいたと思う。このような場で今までの繋がりを再確認し、また新たな方との知り合うきっかけとなっている。全曹青の被災地支援では宗教色を出さない事とし、宗教に関わらず、さまざまな方に足を運んでもらえるように配慮していた。そのために、参加する団体には地域の名産品・銘菓などを持参いただき、おいしいものや地域の話題など、自然に会話がはじまることにも留意した。しかし、回を重ねるにつれ参加者より、御詠歌や法話を望む声が上がるようになった。前述の通り門前町には曹洞宗大本山總持寺祖院があり、地元の方々には「本山さん」と呼ばれ大切にされている。仏教に親しみのある風土では、僧侶が宗教を活用しメンタルケアにあたることも大切であると気づかされた。

写真 13　僧侶と談笑する住民

御詠歌をお唱えした集会所では、涙を流す参加者もおり、「発災以降必死に生きてきた、泣く余裕もなく今日まで月日が過ぎた、参加してよかった」と話され印象的だった。数珠作り体験では「自宅が倒壊して仏壇も神棚もすべて無くした。来年の 1 周忌にはこの数珠をもってお参りに行きます」と話されていた。

8. 令和 6 年奥能登豪雨

9 月奥能登豪雨では門前町も大きな被害を受けた。仮設住宅に入居し、ようやく生活に慣れてきた矢先での災害である。河川が氾濫し仮設住宅も床上浸水の被害を受けた。傾聴活動を一度中止し、土砂撤去などの支援を検討したが、被災者より「こういった時だからこそ来てほしい」との声があり、傾聴活動を継続しながら更なる支援として、全曹青が加盟している全日本仏教青年会との共催で「和み落語カフェ」を 11 月に開催した。この支援イベントは地域で一番人が集まる門前公民館を会場に、「突撃！隣の晩ご飯」で有名な落語家桂米助さん、石川県出身桂空治さんらに落語を披露していただいた。当日は 120 名ほど老若男女集まり終始笑顔が絶えない時間となった。8 か月避難所として使われ、陰鬱な印象が強い場所が笑い声に包まれたとき心から「安心（アンジン）」の時を過ごしてもらえたと感じた。

写真 14（左）、写真 15（右）　「和み落語カフェ」

9. おわりに

令和 6 年能登半島地震の災害支援活動を通して、私たち僧侶は被災地での活動に素養があると実感した。技術的な面では、修行中に身に着けた細かいところまで清掃する事が衛生管理に、修行僧 200 名の食事の準備をしたことが炊き出しに活きた。

また、普段の檀信徒との付き合いからも、大切な人を亡くした方への接し方、要配慮者と呼ばれる高齢者へも・目配り・気配り・思いやりをもって接することができると考える。

何よりも曹洞宗の教えの一つである同事として被災者の立場に立ち、同じ気持ちで共に悲しみ、寄り添って支援を行うことは僧侶の本懐ではないだろうか。